

「1960年代の黒い演劇」〔?〕：その意識と思想

著者	赤松 光雄
雑誌名	神戸外大論叢
巻	31
号	4
ページ	75-92
発行年	1980-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001953/

「1960年代の黒い演劇」〔Ⅱ〕

—— その意識と思想 ——

赤 松 光 雄

Kennedy の幻想的で前衛的な不条理劇とは対照的に Lonnie Elder Ⅲの『黒い老人の儀式』（2幕）‘Ceremonies in Dark Old Man’（1965）は、リアリスティックな手法で黒人街に住む黒人一家の悲劇を描いている。作者は各地の演劇会議の議長などを勤めている劇作家であり、The Negro Ensemble Company に所属する俳優でもある。この戯曲は、1969年度のピューリッツァ賞投票で次点に推され、The Outer Critics Circle Award, Drama Desk Award ほか数々の受賞に輝いた。New York の Harlem の貧しい理髪店が舞台。人物は、50代半ばの怠情な父、黒人ゆえに操縦士になる夢も破れ、「ハーレムじゃ、仕合せな者はいないさ……ぼくはこの世でそんな奇麗なものなんか見たことがなかったんだ」と云って訳の分らない醜い抽象画ばかり描いている長男と、それに次男。一家の働き手は、「7年も散髪屋をしながら、ろくにホットドッグも買えやしない」と愚痴をこぼしながらも、健気に一家を支えている娘。過労がもとでしばらく前に亡くなった母の死後は、一段と口やかましくなった娘は、家業に身を入れずにチェッカーにうつつを抜かず父に怒りが爆発し、家族の男たちを前に、2週間のうちに職を探してこない、私は家を出ると宣言する。

不況下のハーレムで、黒人が職につくのは容易ではない。困り抜いているところへ、コーン・ウイスキーの密造・密売から、万引まで手掛けている「ハーレム植民地化反対協会」といういかかわしい民族運動団体からのぼろいもうけ話に、男どもは、姉の諫めも耳をかさず、渡りに船とばかり飛びついてしまう。盗みまで働く弟は、その金で兄に誕生日の贈り物をし、父も金

遣いが荒くなり、若い女に惚れて入れ込む仕末。弟が盗みの現場を押えられ、射殺されたという知らせが兄と姉のもとへ届き、劇はクライマックスを迎える。そのあと、女に騙されていたことが分り、やけ酒ををあおって帰って来た父が、開幕のシーンと同じ恰好で、友人相手にチェッカーをやっている。もののはずみで初めて勝った。「ジェンキンス、お前はおれがチェッカーをやって勝ったりしたら、その日がおれの生涯で一番不幸な日だなんていったな……だけど、やっと今日、その日が来たんだぞ——正直いって——ほんとにいい気持だ！」⁽⁸⁾と云った途端に、予感に襲われ、さっと階段へ行行って振り向き、「おい、ボビー〔弟の名〕はどこだ？」というせりふで幕が閉じる。この劇には、白人は一人も登場しない。だが、黒人スラム街のやり切れない逼塞状況の下での圧迫感がひしひしと観客の胸に伝わってくるであろう。いかさま黒人運動団体は、白人の人種主義者や市長などを的にした投げ矢を売ってもうけているが、Harlem を掩う‘白い影’に対する庶民の鬱積した憤りを示している。主要人物の一人びとりに血が通い、まやかしの団体の会長の性格描写にも神経が行き届いている。

「3幕の黒い黒い喜劇」という逆説的な副題を添えた Charles Gordone (1925-) の『立派な人間になれない所』(3幕)‘No Place To Be Somebody’は、1969年5月、作者の処女作として初めて上演されるや忽ち批評界の絶賛を浴び、同年 Drama Desk Award を受賞し、さらに翌70年、オフ・ブロードウェイの演劇で初の演劇部門ピューリッツァ賞を受けた。New York 市の downtown で主人公、Johnny が経営する酒場が舞台。彼は白人権力機構に抵抗してブラック・パワーを渴望し、自ら黒人マフィアを打ち建てようとする過激な思想と、激しい性格の持主である。作家で詩人で歌手という多才な肌の白い黒人、Gabe が、各幕開けに登場し、巧みなナレーションで劇の展開を導く。マフィアを夢みる Johnny は、10年の刑で服役中の詐欺師、Sweets Crane を尊敬し、マフィア団を組織する際の指導を心より願ってお

(8) William Couch, Jr. (ed.) *New Black playwrights* (Louisiana State Univ., 1968) pages 153 ~154.

り、その出所を待ちわびている。ところが出所した Sweets は、余命わずか半年と医者宣告を受けていて、昔日の面影はない。その上、Johnny にしきりに翻意を促がす。「なあ、ジョニーや、お前は白人熱にかかっているんだ……チャーリーさん〔白人一般を指す〕のいいところを真似して、人間らしく生きることができないんだ。奴の悪いところを真似したんだよ、おれたちは。おやじも、又そのおやじもな。悪いチャーリーみたいになろうとして、人生を無駄に生きてしまったんだ。いい服を着たり、大きな自動車を買ったりして。それで余計、奴が憎くなり、自分も憎くなったんだ」⁽⁹⁾最後に Sweets は、白人マフィアと対決した Johnny を助けようとして、殺される。Johnny 自身も、おれたち黒人は白人相手にたたかるとんだぞと云って、それを否定する Gabe を臆病呼ばわりして、ついに射ち殺されてしまう。

Johnny の酒場には、売春婦、詐欺師、音楽家、公民権運動の学生、腐敗政治屋など、さまざまな人物が集まって来るが、Johnny との関係がもとで白人女が自殺する事件や、黒人女と白人男との恋など、人種的タブーに絡んだサブ・プロットが熱っぽく繰り広げられる。Johnny の深層意識を代弁し、予言めいた言葉を吐く Machine Dog という人物が生彩を放っており、きわめて‘黒い’スラングを口にして、黒白間に火花を散らす愛と憎しみ、憤り、互いの存在から生じる不安感を浮かび上がらせている。Gordone は「‘黒ん坊’の困ったところは、人種に夢中になり過ぎることだ。完全に白くなりたがっている奴もいれば、完全に黒くなりたがっている奴もいる。しかし黒人の経験は黒ばかりでもないし、白人の世界は白ばかりでもない」⁽¹⁰⁾と云っているが、この戯曲では、過熱した宿命的な黒白関係のなかで生きねばならない‘困った黒ん坊’の黒人体験を、作者自身がどうにもならない激しい愛憎共存の響きをこめて描き出している。

Thomas Pawley (1917-) の Kipling の詩から題名を取った『騒ぎと叫

(9) Charles Gordone. *No Place To Be Somedody* (The Bobbs Merrill Co., 1969) pages 39-40

(10) Clifton F. Oliver and Stephanie Sills (eds.) *Contemporary Black Drama* (Charles Scribner's Son, 1971) page 385.

び』は、オーソドックスな落ち着いた作風の戯曲で、背景を南部の田舎町に設定し、第一次大戦の頃から第二次大戦の終る頃までの約一世代にわたって、黒人大学に勤める教授とその一家の生活を描いた（黒人演劇で初めての試みであろう）戯曲である。著書は Virginia 州立大学を卒業後、英語・演劇を教える大学教授で、幾篇かの戯曲を書いているが、自身の体験がこの劇に幾分織り込まれているようである。各場の始めに、長男がナレーションで状況を説明する。白人商店で差別的な扱いを受ける不快な出来事ののち、教授は念願の Virginia 州の黒人大学に職を得るが、キャンパス内に住宅をあてがわれたものの、給料は安い。過重な仕事に疲れ果てて帰宅する夫に、年の若い妻は不満で、教職員のダンス・パーティに行く、行かぬと、いさかいが起こる。ある場では、教室で英語の授業をしている教授のもとへ、息子の一人が妻の四人目の子供のお産を告げにやって来るのだが、熱心な授業ぶりと茶目っぽい学生とのやりとりが興味深く描かれる。

大不況に見舞われると、給料は20%も削減され、親思いの長男は家計を助けようと盗みをして両親に叱られるが、ついに妻も夫に逆らって辛うじて職を見付ける。欧州で戦端が開かれる頃、教授の著作出版への期待は、出版社の倒産のために挫折し、加えて二人の息子は、沈滞した田舎町をあとに働きに行くという。心労が重なり更け込む教授に、追い討ちをかけるように定年退職が迫ってくる。学校をやめると住宅を空け渡さねばならず、乏しい年金ではとても暮らしてゆけない。生涯を大学に捧げた教授に、他の大学での生活は考えられず、寂しさと苦しさを酒にまぎらし、妻もめっきりと更ける。幸か不幸か、南部で黒人である彼には誕生の確かな記録がなく、願い出た一年の猶予が聞き入れられるが、再度、定年延長を求めて学長と面会をした教授は、けんもほろろに断られる。いよいよ、永年住み慣れたキャンパスからの引越しが始まるが、教授は沈み行く船の船長のように、家を離れようとしない。登場する息子の一人は、子供の頃から病弱で、入院して手術する費用も満足に支払えない状態だが、黒人の上、病弱のため人生にかけた望みがかなわず、自暴自棄に陥り、自殺行為に走る。全体を通じ暗い事件の連続で、

エピソードが丹念に積み重ねられているが、立体的な劇的構成を欠いているのが惜しまれる作品である。

これとは対照的に短い作品であるが、Carol S. Freeman (1941 -) の『自殺』(1幕) 'The Suicide' (1968) は、黒人の貧しく苛酷な生活を、象徴をもって雄弁に表現している。蒸せ返るように暑い南部のアパートの一室、自殺した主人の棺桶を前にして、訪れた牧師が赤貧のせいで無料のお祈りを捧げている。壁を隔てて隣人のプレーヤーががなり立てるのに業を煮やした未亡人が、廊下で隣人と取っ組み合い、刃物で隣人を刺してしまう。部屋に戻って来ると、誰かが棺を開けたのか、遺体の顔にはえがうようよとたかっている。彼女は、誰が開けたのかと、悪態をつきながら警官に引きずられて行く。牧師は別の警官に向って、「どうか閉めて下さい、お巡りさん、はえが……」と叫ぶ。ストーリーも単純だが、観客に見えない遺体の顔に群がるはえにくっきりと焦点が定まり、鮮やかに隠喻が残像となって印象づけられている。

戯曲集“Black Scenes”の編者でもある Alice Childress (c 1920-) の『荒野の中のぶどう酒』(1幕) 'Wine in the Wilderness' は、60年代の黒人暴動が起こっている最中の New York の Harlem のアパートが舞台。部屋を飾る彫刻にも、壁掛けにも、絵画にも、‘黒’の意識が浸透し、世界の他の有色人への関心も反映しているという独身の中年の黒人画家、Bill の一室である。題名の‘荒野の中のぶどう酒’はこの画家が取り組んでいる三枚連作の絵を指している——黒く気高い理想のアフリカ女性を中央に描き、両側に、無邪気で汚れなき少女の像と中央の理想像とは正反対の、無智、粗野、下品、最も墮落してしまったアメリカの黒人女とを置くというもので、最後の絵はなかなかモデルが見つからないので白紙のままである。仲仕の老人、Oldtimer が暴動の中で掠奪して来た品を持って訪れ、‘黒い’意識を体現した Bill から、「革命は掠奪や盗みではない、解放のためだ」と諫められる。そこへ主人公の友人である作家 Sonny-man と社会事業家のその妻 Cynthia が、三枚連作の残った絵のモデルにと、工員の Tommy を見つけて連れて来

る。おしゃべりで、教養のない Tommy は、ビルにとって最高のモデルであった。なだめすかして、早く絵を描きたいのだが、事情を知らぬ Tommy はあれこれ注文をつけて、Bill を苛立たせる。たまたま Bill が電話口で、‘黒いアフリカの王女’の絵の気高さ、美しさを話しているのを耳にしていた Tommy は、自分のことと感違いして感激し、肝腎のかつらを脱いで、モデルに坐ろうとする。Bill は、もう Tommy イメージが違ってしまって焦れど製作にかかれぬ。人間としての素朴で素直な彼女をすっかり気に入る、絵を描かずに彼女を抱擁してしまう。

翌朝、Oldtimer が Tommy に、隠していた事実——最低の女のモデルだとうっかり明かしてしまう。作家や画家という人種は、自分より高等だと思っていた愚かしさ。‘nigger’という言葉を使うと、‘Afro-American’といい給えと説教をした Bill に向い、Tommy は腹の底から‘nigger’と痛罵する。あんた達は、歴史の中に出てくる人間とか、芸術は理解して尊敬するくせに、生きて呼吸をしている人間は、憎むのよ。Bill は翻然と覚った。今まで自分は心ではなく、頭の中だけで絵を描いていた。立ち去ろうとする Tommy を押しとどめ、彼女を中央に据えて、両脇に Sonny-man 夫妻を配し、新しい‘荒野の中のぶどう酒’の創作に取り掛ろうとするところで、幕が降りる。黒人暴動という60年代のセンセーショナルな事件を背景に置いて、作者は似而非黒人意識を拡大して呈示して見せる。Bill, Sonny-man, Cynthia ら知識人のなかにひそんでいる冷淡、冷酷、打算は、白い中産階級の反映だとし、ひいては黒人の同化志向に反省を求めているのである。逆に、素朴な Oldtimer や Tommy ら大衆のなかに本当に人間的なものがあり、真の‘黒’の精神も内在していると、作者は指摘しているのである。時代の行き過ぎた黒い民族主義にも、強い批判を加えている。この一篇をすぐれた喜劇に仕上げているのは、登場人物の交すユーモラスな対話、きびきびとした筋の運びであり、それが人物の価値の意外な逆転を無理なく、説得力あるものになっていることである。

Peter DeAnda の『待ち望む婦人たち』（2幕）‘Ladies in Waiting’（1966）

は、刑務所の監房の女囚を描いた一篇である。女に異常な関心を見せるレズの Agrippe, 恋人の面影を慕いつづける売春婦の Carmen, 狂信に近いほど信心深い Lorry と、きわめて個性的な黒人女たちの監房に、若くて可愛らしい白人娘の Lawra が仲間入りしたため、さまざまな波紋がひろがる。彼女は刑務所と病院の待遇改善を叫んでデモをやったという理由で、30日の刑を申し渡され、‘白い黒ん坊’ときめつけられたのである。したたかな中年女たちの異常な場における人間関係とセックス、彼女たちと純真で世間知らずの白人娘との人間関係、意地悪な看守たちとのいさかいなど、正面切って人種関係を扱った作品ではないが、異常な場の人間関係の一つの実験であり、作者の基本的な姿勢であるヒューマンな温かみが、白人娘を迎える女囚たちの扱いに感じ取られ、暗に人種間の協調を訴えてもいる。

同じような主張をユーモラスなアレゴリーで語る作家に、Douglass Turner Ward (1931-) がいる。Hughes を想わせる 軽妙な作風をもって現代の黒人演劇を担う一人 であるが、Douglass Turner の名でも知られる舞台俳優であり、Sidney Poitier のあとを引き継いで『日なたの干ぶどう』の主演 Walter を演じた経歴の持主である。自作の『めでたし、めでたし』(1幕) ‘Happy Ending’ (1966) と、『不在の日』(1幕) ‘Day of Absence’ (1966) の二篇の上演の際、St. Marks Playhouse で自ら演技し、1965～66年の脚本と演技の両分野で、Obie 賞に輝いた。『めでたし、めでたし』の舞台のハーレムの一室は、冷蔵庫、ストーブ、テーブルなど、すべて贅沢な新品調度が揃った中年の黒人女二人の部屋である。二人が手伝いをしている白人家庭で、妻の不貞がもとでひびが入り、離婚話が持ち上がっていることを知った二人が悲嘆にくれている。‘新しい黒人’ そのもののようなおいの大学生が訪ねて来て、白人夫妻への忠節心から泣いていると思い、二人の古さ加減を笑い出す。ところが、二人の豊かな生活費も、食糧も、衣類も、みんなこの白人家庭のおこぼれか、それともそっと頂戴していたものだと分る。この大学生の学資も出所は同じ。それを聞いて、おいも一緒になって泣き出した。そこへ白人家庭からの電話——和解成立、離婚は取り止めたという‘ハッ

ピー・エンド’の短い一幕劇である。過熱した‘黒い’意識に投げかける作者のアレゴリーは、辛辣である。黒白は相互に依存し、否応なく協調せざるを得ない運命共同体なのである。

Ward が「諷刺の幻想劇」と銘打った『不在の日』は、同じような発想から同じことを今度は白人に訴えるが、こちらは大層な諷刺劇で、同巧のストーリーは、William Melvin Kelley の小説、『違った大鼓』‘A Different Drummer’ (1962) に見られる。黒人がその人口の半ばを占めるという典型的な南部の街で、黒人がある夜、ことごとく蒸発してしまうという‘真夏の夜の夢’である。朝がけだるく明けると、事件を知った街は大騒ぎになる。市民の間に怒りと欲求不満が渦を巻き、街を支える黒人労働力を奪われて、生産と商品の流通の機能が停止する。テレビを通じて、白人市民会議と K.K.K. をもじった‘Council Clan’氏が「これは明らかに策略」とわめけば、牧師は「ブードゥー教呪術師の仕業じゃ、ブードゥー教の」ときめつけ、市長は、脅迫と哀訴こもごも、黒人の速やかな帰還を訴える。大統領から一等災害地の認定がくだり、連邦兵が現地に向うことになる。ところが天変地異はそれっきり、一夜明けると、何処からか、黒人は何気ない顔をして、みんなすっかり元通り。どうしたと聞いても、知りませんという。

幻想の効果を高めるため、殆んど大道具も小道具も使わないで、小道具はジェスチャーで代用し、従ってシーンの転換や劇のテンポは容易になり、街頭、商店、家庭、電話局、放送局などのシーンが目まぐるしく移り変っては、白人たちの狼狽ぶりが描写されてゆく。殆んどの登場人物は白人であるが、作者は、俳優は全部黒人とし、メーキャップで顔を白く塗るよう指定する。滑稽感を盛り上げる‘黒い minstrel・ショー’の喜劇である。他の作家の戯曲にも、人種統合が進んでいない現実を逆手にとって、こうした効果がしばしば狙われる。但し書きの中で、作者はもし白人が演じる時は、真剣な悲劇として演ずると、より効果が上がるといっているが、これはきびしい皮肉である。

次に音楽劇に目を転じよう。ミュージカルの名にふさわしい大作は、Loften

Mitchell の『朝の星——バート・ウィリアムズの生活の情景』（2幕）‘A Star of the Morning——Scenes in the Life of Bert Williams’（1965）であろう。ミュージカル史に残るボードビリアンの Bert Williams を、19世紀の終り頃の San Francisco の裏ぶれた安酒場を流し歩く若い時代から、コンピの Walker を見出して旅回りをするうち、舞台上の‘ニグロ・ルネッサンス’に貢献した興行主、Jessie Shipp に拾われ徐々にスターダムに登竜し、1907年、華やかにブロードウェイのフォリーズの舞台を踏むまでを、実録に沿って描いている。全19場のシーンにたっぷりと歌と踊りを盛り込んだ楽しい一篇であるが、『彼岸の土地』に見せた作者の人種差別に対する姿勢との共通点を、主人公 Bert が、顔にすみを塗る伝統的な minstrel に反対し、自らを大衆芸人、特に黒人大衆の芸人であるとの誇りを持ち、ひいては、ブロードウェイの人種差別に憤慨して、興行主とたもとを分ち、Harlem の舞台へと帰って行くという描き方に見せている。このほか、Mitchelle は、‘Jamaica Farewell,’ ‘Island in the Sun’ の作曲家、Irving Burgie の協力を得て、ミュージカル『ビムシャアの歌』（2幕）‘Ballad for Bimshire’（1968）を出版しているが、Barbados で生長する娘を主人公に選んだ一篇である。

Langston Hughes には、前述の『ジェリコージム・クロウ』のほか、『喜劇のタンボリン』（3幕）‘Tambourines to Glory’（1963）〔拙稿「最近のアメリカ黒人文学」『外大論叢』第16巻6号参照〕があり、この福音歌をテーマにした劇は、先に戯曲が、次に同じ題の小説が書かれ、再度戯曲に書き直されている。Hughes には何かの形で書き直した作品が多いが、南部の人種問題を扱った30年代の黒人劇の傑作『混血児』（3幕）‘Mulatto’（1935）〔拙稿「ラングストン・ヒューズの戯曲」『外大論叢』第15巻5号参照〕を福音歌のミュージカル『放蕩息子』（1幕）‘The Prodigal Son’（1967）に仕上げている。さらに、黒人解放の歴史的な歩みを自作の詩と、黒人霊歌、福音歌、ブルース、抗議歌をちりばめてつづった『自由になりたくはないか？』（1幕）‘Don’t You Want To Be Free?’（1938）は、1937年、Harlem

Suitcase Theater の 結成時に、始めて舞台化された劇で、当時記録破りの 135 回の上演を誇ったが、以来時代に即応するよう幾度も加筆されてきた。最後の改定版（6 度目の 1963 年版）によると、マッカーシズムの赤狩りや、公民権運動などが織り込まれた今日的な戯曲となっている。

Val Ferdinand (Kalamu Ya Salaam) (1947-) の『ブラック・ラブ・ソング・No. 1』(1 幕) ‘Blk Love Song Ⅱ 1’ (1969) は、公民権運動の推進と黒人文化の創造を目標に、南部の地方を巡回して実績を重ねた The Free Southern Theater 所属の劇作家の一人である作者が、同劇団のレパートリー の一篇にと、書き下ろした戯曲である。作者は自身の創作の立場を「強力な黒い国家を建設しようとする解放のための闘いに貢献する‘黒い’⁽¹¹⁾ 芸術家と考える」と云っているが、この発言は The Free Southern Theater の主張であるとともに、Amiri Baraka が 1965 年に結成した黒い芸術運動の劇団、Black Arts Repertory Theatre and School (本稿 86 ページ参照) と同一線上にある。全篇が韻文と歌で構成され、アフロ・アメリカ人としての identity を追求した戯曲である。‘アフリカの種子’は、新世界アメリカの地獄へと放り込まれ、黒人は鞭打たれ、せり売り台に立たされ、女を奪われ、樹に縛られ焼かれ、逃亡して北極星を追った。登場した白人男女が、彼らの目には‘ニガー’としか映らない黒人男女を誘惑しようとする。ここアメリカにわが家は見つからないから、‘アフリカの種子’から黒い国家を開花させねばならない。理想を説く人物 ‘Black Man’ と ‘Black Woman’ が登場し新しい時代の到来を告げ、実践による奴隷的身分からの脱却を訴える。これという際立ったストーリーはなく、作者は卑俗な、時には猥雑な民衆の言葉によって、血と汗と泥にまみれた‘古きニグロ像’を刻み上げている。

人種統合をテーマにした‘抗議’のミュージカル、『飛べ、黒鳥よ』(2 幕) ‘Fly Blackbird’ (1960) は、Los Angeles の街の歴史やそのトピカルな問題を扱った、特異なミュージカル・レビューなどを脚本にしている C.

(11) J. V. Hatch (ed.) *Black Theater U.S.A.* (The Free Press, 1974) page 866.

Bernard Jackson (1927-) と、アメリカ黒人演劇の大部なアンソロジー、“Black Theater U.S.A.”の編者、James V. Hatch (1928-) の合作である。Los Angeles の街頭、5 セント・10 セント・ストアの前で、南部の‘坐り込み’運動を支援し、公民権を要求するプラカードを掲げ、ピケをはる若い人たちの物語りである。地面に押えつけられるのはもう沢山、空高く舞い上がりたいと切望する「黒鳥」団のリーダー格は、頭の良い、歌のうまい Carl。彼が見染める娘、Josie の父は有名な黒人歌手であるが、‘アングル・トム’の彼は体制側の手足となってスターを夢みる Carl を懐柔しようとする。一時は運動も仲間も棄てて、華やかな舞台に立とうとする Carl は、騙されていたことを知って、父のもとを離れ彼のあとを追って来た Josie と共に、投獄も辞さぬ決意をもって再び運動に馳せ参じる。

メイン・プロットの進行の合間に挿入された図書館（黒人を‘黒ん坊’の地位にとどめる宣伝機関の役割を果たそうとしている）のシーンで、デモ攻勢に嫌気がさし転動を望む白人の Brown が、司書の婦人の Brown と共通の姓のルーツを探っていると、思いもかけず家系に黒人の血が混っている本当の‘brown’であることを発見し、途方に暮れる。差別の愚かしさが巧みに戯画化されたシーンである。Carl が白人の医師から‘恋の秘薬’を飲まされ、夢みたスターどころではない‘黒ん坊’役の端役になって登場する幻想の劇中劇は、このミュージカルの最大の見せ場で、筋の上で Carl の運動への復帰を支える鍵であるが、同時にハリウッド及びブロードウェイの歴史的な黒人差別への諷刺がこめられている。さらに、太平洋戦争で強制収容所に収容されたことがあるという二世の日系アメリカ人が登場して、ピケに加わり二度投獄される。作者は少々中国人と区別のつかない日本人に描いているものの、共感をもって扱っている。本篇は1960年版によったが、‘坐り込み’運動が始まった一周年を記念して、Los Angeles の Metro 劇場で上演され、翌62年にかなり書き改められて、New York 市で上演、61～62年度の Obie 賞を受賞した。

アメリカの演劇運動の主導権は、先に述べたように、1950年代に、商業主義に毒されたアメリカ演劇のメッカ、ブロードウェイから、オフ・ブロードウェイの劇場に移り、さらにオフ・ブロードウェイも徐々にブロードウェイ化の傾向を見せると、オフ・オフ・ブロードウェイの運動となり、新しい時代を迎えるに至った。従来の劇場のみならず、教会や、映画館や、倉庫を改造した小劇場までが、演劇運動の創造の場を提供することになる。ブロードウェイの劇場では、伝統的に人種差別の壁は厚く、黒人観客が廊下、立見席以外の席を買えるようになったのは、ようやく1950年代に入ってからのものであり、先に Bert Williams の例をあげたが、檜舞台を踏む黒人俳優もごく少数の恵まれた人たちに限られていた。同様に、黒人作家の戯曲がその舞台に載ることも少なく、Hughes や Hansberry の戯曲は、その数少ない例に数えられる。

1950年代から60年代にかけて、人種統合が叫ばれ、脚本と演技の両分野で、ブロードウェイがしぶしぶ黒人の進出にその狭い門を開こうとしたやさき、黒人解放運動に触発された民族意識の高まりは、新しい文化の創造を目指す演劇運動を呼び起こすことになった。統合は形式的な‘tokenism’の状態が進められていたが、もはやブロードウェイに迎合することを潔しとせず、その舞台に背を向け、新しい可解性を追求しようとする‘ブラック・シアター’の運動が起こる。黒人の地域社会で黒人自身の劇場・劇団を持つことの重要性が、劇作家、俳優、評論家の間でしきりに強調された。New York の Harlem では、1958年に20人の俳優が Manhattan Art Theatre を結成しようとしたのは、その先駆的な現象である（Hughes は自作の『ハイチの皇帝』を第一回上演の脚本として贈呈している）。それから7年を経た65年には、黒い文化革命を主唱する Imamu Amiri Baraka をリーダーとする黒人芸術家たちが、Harlem の目抜き通り Lenox Avenue に Black Arts Repertory Theatre and School を開設する。『ダッチマン』を始め、幾つかの劇を上演し、ほかに文化運動の一端として、詩の朗読会やコンサートを開いた。惜しむらくは、体制側の厳しい攻勢と、劇団員の内部対立が原因となって、僅

か3カ月の短命をもって解散したものの、この試みが起爆薬になり、黒人芸術創造の運動は、東部ばかりでなく、西海岸や南部の黒人街、黒人大学のキャンパスで展開され、黒人劇の上演、黒人劇のシンポジウムや討論会、研究会などが次々と開かれるようになった。

当時、New York で黒人劇を上演する常設の劇場・劇団として知られていたのは、Harlem では元映画館を改造していた The New Lafayette Theatre, downtown の Lower East Side の St. Marks Playhouse (観客の4分の1から半分位が黒人) を根城にした The Negro Ensemble Company, それに黒白混合の劇団員で構成された downtown の Greenwich Mews Theatre などであった。

黒人劇の演じられる劇場は、概して小さくて、観客も比較的少なく、観客層も黒人街の劇場では殆んど黒人によって占められるが、黒人街でない場合は人種混合となり、例えば70年代に入って、ミュージカル『干ぶどう』‘Raisin’がNew York の downtown で開幕した時には、観客の人種構成はほぼ相半ばした。黒人作家が作品を書いて生計を立てるのは、大きな困難が伴うが、とりわけ戯曲の世界では、職業的に自立することは難かしい。それ故、悪条件の下にある若い劇作家の卵たちは、昼間労働につきながら、夜は執筆に向う場合も少なくない。著名な劇作家の Ossie Davis は、俳優の身分のほか、公民権運動家、アパート管理人、日曜学校教師、鉛管工という肩書きがつき、これだけである程度彼らの生活が偲ばれよう。

Davis 以外にも、Elder, Ward など、劇作家が舞台俳優を兼ねている場合が多い。彼らは劇作家を志しながら、舞台俳優の体験を積んだことにより、肌で学んだ作劇術を脚本に充分生かしているようだが、観客の心を楽ませるツボを押えているという共通性を持っている。

脚本がたとえ上演されたとしても、戯曲として出版されるとは限らない。戯曲の出版は、脚本の上演数に比べると遙かに少なくなる。60年代に一体どれほどの黒人の戯曲がアメリカで出版されたのか? “Black Playwrights”

によると、1950年から54年までに34篇、55年から59年にかけて29篇が数えられ、60年代に入って、64年までには、41篇と漸増の傾向を見せ、翌年から急カーブを描いて増加し、65年24篇、66年32篇、67年42篇、68年65篇、69年89篇⁽¹²⁾となっている。

登場人物の人種別を60年代に出版された戯曲のうち込れるもののみを拾ってみると、黒人だけが登場する戯曲は88篇（うち7篇は黒人1人のみ）、黒人と白人両方が現われる戯曲86篇とほぼ同数に達している。ただし厳密な意味で、この分類は厄介で、例えば前述の『不在の日』などは、*Black Playwrights* によると、は黒人が白人役を演じるということで、黒人のみが演じる劇に入れている。これに対して、人種の指定がないか、或いは黒白の何れでも可であるか、それとも何れとも受取れる‘非人種’劇は僅かに16篇と少なくなり、白人ばかりが登場する劇は3篇ときわめて少数になっている。黒人劇の人種的性格を物語る数字である。

経済的な理由や、劇場の狭さ、テレビの影響等、種々の要因から、上演時間や幕数は短くなる趨勢にある。60年代の黒人戯曲中、1幕物は165篇、（うち6篇は長時間の1幕である）、2幕は24篇、3幕は33篇、4幕2篇であり、1幕劇が全体に占める割合は、74%を占めている。これは50年代に出版された1幕劇が同年代の黒人戯曲全体に占める比率の65%に比べると、一段と短くなる傾向を物語っている。この傾向は一つには作劇術の進歩にもよるが、劇の手法や表現にも影響を及ぼし、舞台装置や照明や衣装などの扱いも、ますます実験的、前衛的になり、大道具、小道具は、シンボリズム、ジェスチャーをもって当てるという試みも増えてきている。

1960年代の黒人演劇は、主として黒人大衆の教化・啓蒙という大きな役割を担って、公民権運動から民族主義運動に至る黒人解放運動の多様な様相や

(12) *Black Playwrights, 1823-1977, Annotated Bibliography of Plays*, (R.R. Bowker Co., 1977) より、単行本、アンソロジー、その他の形で出版された戯曲に限り、判明し得るもののみより。以下本文の分類は同書より作成。ただし本書に洩れている作品も少なくないようで、実際は本文の数をかなり上回る。

局面を舞台に反映させている。そしてその理念や主張を観客に訴えて、運動への理解を促がし、連帯への手を差し伸べている作品が少なくない。だがその一方では、運動そのものの反省や批判とともに、黒人運動が目標としていた自由と平等に基づく人種統合の‘夢’についても、劇作家たちは、真剣に考察を加え始めた。人種統合が、果たして黒人の真の民族的・人間的解放に導くものかどうか？ この疑問は、必然的にアメリカ社会の再定義を必要とすることになる。かくして、社会から疎外されて来たアウトサイダーの視点から、距離をへだてて、自己の identity とのかかわりにおいて、見詰められたアメリカ社会が、黒人劇の舞台に表現されることになった。

Baraka, Bullins を代表とする一群の劇作家たちは、使い古され、世俗のあかにまみれた慣習の言葉を捨てて、卑語や俗語に新しい衝撃的で、強烈な意味を込めた‘黒い’用語をもって、アメリカの社会的・文化的な価値と権威に挑戦し、それを打破しようとする。彼らの抵抗は、そうしたアメリカ社会がこれまで強要してきた偽りの identity である‘ニガー’像や、さらには‘ニグロ’像と対決し、その像の呪縛から完全に自身を絶ち切ろうとする努力が、‘黒い力’‘黒い美’のスローガンの下にあった時代の演劇活動に際立っている。

新しい‘黒人像’は、J.O. Killens が云ったように「青白い生活の主流の中に幾滴かの黒い血を、幾ばくかの黒い知性を注入しよう」とする姿勢を持つ故に、黒人のアメリカ社会への完全な一部化、‘白い’中産階級化の‘同化’には反撥し、‘統合’するとしても、民族的な完全さを保有したままの姿での、‘統合’でなくてはならないと考える。この時代の多くの作品がそのことを物語っているが、劇作家たちの筆が、黒人運動の指導者層にきびしい批判の目を浴びせるのも、‘離反’傾向の指導者が喝采を受けるのも、一つには、その反映であろう。

‘黒い’自己の正しい identity は、過去の虐げられてきた自己の歴史的体験の中に求められた。この時期に歴史劇（例えば歴史と諷刺といった両方のジャンルにまたがる作品はどちらにも数えている、以下同じ）に分類され

る戯曲は20篇に上っているが、歪曲されてきたアメリカ史のなかから、奴隷反乱の指導者や民族の英雄が、新しく見直されて登場する。さらには、奴隷船の彼方のアフリカに目をやり、西欧的なもののカウンター・バリューとしてのアフリカの文化と伝統に、アフロ・アフリカ人の自己への投影を見ようとする。これは自らを被圧迫者の立場に置くことになり、第三世界の人びとに対する関心と共感が呼び醒される結果となる。

過去の歴史に自己を探る過程で、黒人音楽が貴重な民族的資産として高い評価を受けることになった。60年代の戯曲のうち、16篇が音楽劇である。しかしこれ以外に、黒人霊歌、福音歌、ブルース、抗議歌など使用した劇は、ニグロ・スピリチュアル コスベル・ソング 枚挙にいとまがなく、プロテスト・ソング 黒人音楽を除外すれば、黒人劇は成立しないと云っても過言ではない。同じように、アフリカの歌と踊りも、黒人劇の identity を支えるとともに、その舞台を華やかに彩る役割を果たしている。

歴史劇や音楽劇と並んで、喜劇の分野に入る戯曲が多いことに注目せざるを得ない。この時期の悲劇が僅か6篇に対し、諷刺劇は11篇、喜劇は24篇の多数に達している。差別に直面しても、従来の作品にしばしば見られたように、白人の慈悲心に訴える哀願の調子は姿を消し、或いは逆に悲憤慷慨する作品も少なくなっている。差別する姿の滑稽さや、不合理さを、辛辣な諷刺の笑いや、憚ることのない哄笑をもって応じるのである。‘泣かないために笑おう’とした昔の道化師は、むしろ対象として描く白人を権威の座から道化の立場へと、転換させている。時代的な推移を感じざるを得ないが、こうした笑いは、作品そのものをより高い次元に引き上げることに成功している。いままで黒人文学の主流を占めてきた‘抗議’文学のジャンルに入る戯曲は、11篇と減少している。一つには、‘白いアメリカとの対話を断ち切り、’‘できるかぎり自身の民族にのみ語りかけ’ようとしたこの時期の演劇の性格にもよるのであろう。

だがこうした笑いの感性にもかかわらず、時代の激しい民族意識の高まりは、ともすれば激越な調子の白人憎悪と結びついたことも否めない事実である。概してこれらの作品は、文学的抑制に欠け、Baraka ほか少数の作家の

作品を除いては、見るべきものは少ない。白人への憎悪は、自己への憎しみや恐怖となってはね返って人物をゆすぶることはない。作品によっては、対白人への極端な愛と憎しみの相反する感情が絡み合って、人物は破滅の淵へと導かれる。‘growth’を以て憎しみを制すべしと唱えたのは Chester Himes であったが、黒白を隔てる壁よりも、結ばれた宿命のきづなを強めるべしとして、‘分離’傾向に警告を与える作品の存在にも注目せざるを得ない。

一方では、こうした民族の将来の方向や、イデオロギーや、解放運動などと直接かわらずに、人間とその生活のさまざまな状況の文学的真実を、地道に描こうとする作品も、決して少なくはない。人間心理をその深層に掘り当てようと試みる作品も含めて、黒人劇は多様な表現をもって、次の時代の新しい創造へと受け継がれてゆくのである。

Bibliography

Abramson, Doris E. *Negro Playwrights in the American Theatre. 1925-1959.* Columbia Univ. Press, 1969.

Arata, Esther Spring & Rotoli, Nicholas John. *Black American Playwrights, 1800 to the Present: A Bibliography.* The Scarecrow Press, Inc., 1976.

Black World. Vol. XXIII No. 6. April, 1974. The Johnson Pub.

Brasmer, William & Consolo, Dominick (eds.). *Black Drama: An Anthology.* Charles E. Merrill, 1970.

Bullins, Ed (ed.). *New Plays from the Black Theatre.* Bantam Books, 1969.

Childress, Alice (ed.). *Black Scenes.* Doubleday, 1971.

J.H. クラーク編, 黒人研究の会訳『ハーレム-USA』未来社. 1968.

Couch, William, Jr (ed.). *New Black Playwrights: Anthology.* Louisiana State Univ., Press, 1968.

Gayle, Addison, Jr. (ed.). *The Black Aesthetic*. Doubleday, 1971.
Gordone, Charles. *No Place To Be Somebody*. The Bobbs-Merrill,
1969.

Hatch, Abdullah & Omanii, Abdullah. *Black Playwrights, 1823-1977: Annotated Bibliography of Plays*. R. R. Bowker Co., 1977.

Hatch, James V (ed.). *Black Theater U.S.A.* The Free Press, 1974.

Jones, Le Roi & Neal, Larry (eds.). *Black Fire. An Anthology of Afro-American Writing*. William Morrow & Co., Inc., 1968.

Jones, Le Roi. *The Baptism & The Toilet*. Grove Press, 1966.

King, Woodie & Milner, Ron (eds.) *Black Drama Anthology*. Signet Book' 1971.

Mitchell, Lofton. *Black Drama*. Hawthorne Books, 1967.

——. *A Land Beyond the River*. Pioneer Drama Service, 1963.

Oliver, Clinton F. & Sills, Stephanie (eds.) *Contemporary Black Drama*. Charles Scribner's Son, 1971.

Turner, Darwin T. *Black Drama in America : An Anthology*. Fawcett Pub., Inc., 1971.